

【取扱い嚴重注意】

平成24年1月10日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 仁保智紀

平成23年12月14日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

細野豪志（環境大臣／原子力発電所事故収束・再発防止担当大臣／内閣府特命担当大臣（原子力行政））

2 聴取日時

平成23年12月14日午後7時30分から同日午後11時45分まで

3 聴取場所

内閣府4号館7階大臣室

4 聴取者

高野利雄 委員

高嶋智光 参事官

加藤経将 参事官補佐

飯崎準 参事官補佐

仁保智紀 主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

下線部については、先方から特に強い非開示の要望があった。

以上

【取扱い厳重注意】

(以下、レコーダーデータ①)

○質問者 既に500人くらい、関係者のヒアリングをして、この12月26日に中間報告を取りまとめる予定でございまして、今まさにその最終作業を行っております。今日、かなり原稿が出来上がっていて印刷に回す段階になっておりますので、せっかくお聞きしたことが中間報告には反映できませんので、最終報告に反映させていただくということになります。

○細野大臣 なるほど。もうそういう状況になっているんですね。

○質問者 印刷と、あと例えば、翻訳をしまして概要を海外に発信する、そういう義務もありますので、そんなことで進んでおります。御了承いただきたいと思っております。

○細野大臣 はい。承知いたしました。

○質問者 個々の問題につきましては、事務局からもまた細かくお聞きさせていただきたいと思っておりますが、まず私の方から大まかなところをお聞きさせていただきたいと思っております。

○細野大臣 お願いいたします。

○質問者 その話に入る前提としましては、例の3月11日の当日は、大臣は補佐官としておられたわけですね。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 その日は、どんな立場で、どんなことをやっておられたんですかね。

○細野大臣 私は、役職が社会保障と国会対策ということでしたので、直接こういう災害とか原発とかいうことでは関わりはなかったのですが、補佐官でしたので総理を補佐するというような、これはもう絶対としての仕事で、その中の分野ですので、当日は、議員会館で会議があったものですからその会議に出ていたのですが、大きな地震でしたので、これはすぐ戻った方がいいだろうと思ひまして、そのまま車で官邸に入りました。

ですから、46分に地震が発生して、ちょっと正確な時間はあれですが、おさまってすぐ戻りましたので、3時にはもう官邸にいたと思ひます。

○質問者 そうすると、菅総理がいろいろ行動される場所は常に。

○細野大臣 はい。ほぼ全て見ています。

○質問者 分かりました。それを前提に質問させていただきます。

今言われるまさに中枢部におられて、事故が起きました。3月15日から対策本部に行かれていて、さらにまた、被害拡大防止とか、今はまさに、冷温停止、安定化に向けてご苦労されておられるわけですが、まず、事故が起きた時点、今の途中経過を含めまして、この福島原発事故に対する思いと言いますか、非常に抽象的な質問で恐縮ですが、どんなふうに今感じておられますか。ちょっと抽象的過ぎますか。

○細野大臣 いや、結構です。

私の場合は、特に福島の方と日頃から向き合っておりますので、もう本当に率直に言って国民の皆さんに申し訳ないと。特に、福島の皆さんには本当に申し訳ないという思いが一

【取扱い厳重注意】

番強いです。

どこにいろんな問題があったかというのを、私も何度も、本当に自問自答しているのですが、かなりの部分は、本当に事前のいろんな準備ができていなかったところに原因があると思っています。

ですから、そこは、本当にここで反省をして、そういうことが起こらないようにやらなければならないという思いがあって、4月から新しい組織も立ち上げるのですけれども、それに関しての準備は、相当私自身もかなり細かいところまで入りこんでやっています。

一方で、事故が起こった後、ではパーフェクトだったかと言うと、それはやはり幾つか、ここはどうかだったんだろうとか、ここでというところがあって、そこについては、しっかりと皆さんで検証していただいて、本当にそこはしっかりと国民の皆さんにも知っていただくことが必要だろうと思っています。

○質問者 分かりました。そういう意味で、今、いみじくもおっしゃられましたが、過酷事故、津波対策の問題ですね。これは、私どもまさに調査しておりますが、大臣としてそのあたりを、漠とした感じでもいいですけども、どんなふうに思われていますか。

○細野大臣 全体として言えることは、日本の原発というのは多重防護になっていると言われていたのですけれども、本当に仔細にいろんなものを見てみると、確かに多重化はされているのですけれども、多様性がないんですよ。電源も水源も全てそうなんですけれども、そこがやはり問題だったと思うのですよ。

ですから、5号機、6号機が生きていますけれども、あれはやはり空冷があったからであって、極めて明確なんですよね。ほかの1号機から4号機一つひとつ見ても、例えば冷却機能一つとっても、電源が落ちてああいう形になったら、本当にあんならざるを得ないという設計になっていて、その辺の思想がやはり間違っていたと。

ですから、本気に誰かが考えて、まさかこういうことがあったらどうだろうかと考えているように見えないですよ。例えば、非常用発電機が1階にあって一番下にあるというようなことが象徴的ですけども、何でこんなことが起こったのか。それは、いろいろと東電の中でも場所について議論があったらしいですが、あそこしか空いていなかったとか。本当に誰かが、1人じゃなくてもいいですが、本当に考えていたら事故は起こらなかったと思います。そこにものすごく、一番反省が必要だったと思います。

○質問者 そういう意味で、まさに極めてポイントをつかれたお話だと思いますけれども、いろんな原因があると思います。誰も気がつかなかった、それは一体何だろうかという、まさに私どもが今調査しているところですが、何か御所見ありますか。

○細野大臣 いろんな要因が、やはり複合的に絡み合っているとは思いますが、まず、東京電力に関して言うと、震災後大分変りましたけれども、やはり個人が自由な発想でいろんなことを考えて、それを言い合って改善をしていくという風通しの良さはないと思いますね、あの会社には。

ですから、恐らく途中で現場の技術者なんかで気がついた人間はいたと思うんですね。

【取扱い厳重注意】

それが経営の判断に生かされていなかったという問題は、恐らく東電にはあつただろうと。これは、あくまで東電という会社をぐっと中で、私はずっといましたから、数か月にわたって見ていているんな人から個人の話も聞いた中での率直な印象です。

もう1つは、やはり保安院も安全委員会もそうですけれども、本当に原発の中の技術で電力会社の原発部門の人間を凌駕するくらいの知識があつて見抜けるだけの能力がない。

ですから、それこそ一番能力のある人間は、原子力部門に関して言うと、残念ながら保安院には来ていない。

ですから、ちょっと僭越な言い方になりますけれども、一線級がないということが検査体制の弱さにつながっていると思います。

○質問者 そうですね。今後の新しい組織というのは、まさにそこが極めて大事になりますよね。そういう人材が。

○細野大臣 そうですね。人材が大事ですね。

あともう1つは、これは私の確信なのですが、やはり保安院という組織はエネ庁ともう密接不可分です。全くイコールと言ってもいいくらいです。

ですから、大目的はエネルギーの安定供給で、小目的が安全と。ですから、保安院の職員は、終始、常に安定供給というものすごく大きな重しをこの辺に持ちながら安全について考えてきていますから、ここの組織の問題はものすごく大きいと思います。

○質問者 あとは、今まさに整理してお聞きしようとしたところを先にお答えいただいたのですが、我が国全体の、例えば原子力に対する安全神話とか、あるいは、安全と言っていかなければならないとか、こういうものが言われていますけれども、今回ずっと御経験された中で何か感じられることはありますか。

○細野大臣 それはありますね。安全ということになっていたのに、本当の意味でのリスクを想定して準備ができなかったということだと思うんです。大前さんがいろんなレポートを出されていて、あれは私が菅総理と相談をしてお願いをしてお出しただいたのですが、非常に言い当てられると思うんですね。どんなダメージを受けても、どんな大きな災害が来ても最後に外に絶対放射性物質を大規模に出さないような設計をしておくべきなのに、それができていない。最後は、原発が潰れても外に出さなければいけないわけですから。潰れないことを前提にしか設計してなくて、それに応じた対応ができていないわけですね。

ですから、原発を守ることと放射能を出さないことということも、分けられていない。こういったところにも象徴的にあらわれていると思うんですよ。

ですから、安全神話で安全だということを言わなければならないがゆえに、本当の意味でのシビアな事故を想定できていないというのはあつたと思います。これは、多分、気がついていたらと思うんですよ。

○質問者 東電もですか。

○細野大臣 ええ。安全だと言わなければならないから対応できないと。そちらに大規

【取扱い厳重注意】

模に投資をすれば、それこそ自己矛盾するのですが、こんなことをやるのは危険だからだろうと言われれば、いやいや安全なんですと言わなければならないという、自己矛盾に陥ってきたことは何度もあって、気がついていたと思うんですよね。それを言い出せなかったのは、まさに安全神話そのものだと思います。

○質問者 東電の中の風通しの問題もありますか。そこは関係ないですか。

○細野大臣 風通しの問題で感じるのは、やはり現場と本店の温度差であるとか、事務屋さんと技術者の立ち位置の違いであるとか、そういったところですね。

○質問者 分かりました。

津波が来まして、全電源が喪失してしまいました、過酷事故が発生しました。現場の吉田所長は、死と境目のところで本当に可能な限りの努力をされて、私どもも直接お聞きしたりして実感として伝わってきておりますが、官邸におられて、東電本店、あるいは現場、いろいろ指揮をされておられたわけですが、例えば総理あるいは細野補佐官からの指示が上手く伝わっていないとか、あるいは曲がって伝わってしまったとか、本店、現場、あるいは官邸との間の問題とか、そういうものは感じられたことはありますか。

○細野大臣 3月15日に統合対策本部を作るまでは、その繰り返しでしたね。

ものすごいフラストレーションを、多分現場も感じていたと思いますけれども、東電の本店も感じていたでしょうし、官邸も感じていました。本店と現場もきちとした意思疎通ができていなかったのは間違いないですね。東電から2人、役員と部長が、まさに東電のしっかり情報の取れる人が官邸に来て、11日の夜からはやっていたのですが、それでも入らなかったんです。彼らが嘘をついていたとは思えないですね。本店からいろんな情報、連絡を受けているのだけど分からないというフラストレーション、本当にそれが一番大きかったですね。

象徴的なのは、海水を入れる入れないの、12日の夜のあの経緯なんかは、その典型ですけれども。

○質問者 それは、例えば、通信手段が上手く行っていないということも大きな理由かもしれません。そのほかに何かありますか。

○細野大臣 通信手段は、非常に大きかったと思います。それと、官邸と東電ということ言えば、お互いに初めて会うわけですよ。本当に東電は何を考えているのかということもありましたね。東電の側も初めて菅総理と相対するわけですよね、社長も、フェローの武黒さんも、■■■■部長さんも。ですから意思疎通がなかなかスムーズに行かなかったというのはありますね。

○質問者 もともと、御承知のとおり、原災法のたてつけとしては、東電が直接官邸に報告するようになるものになっていませんよね。今回、その形になったのですが、何でそういう形になったんですか。

○細野大臣 1つは、すぐに問題になったのは、保安院のERCが動きませんでしたので、保安院に情報が入らなかったんですよね。それで、東電の本店も多分初めは情報が十分入

【取扱い厳重注意】

らなかった時期があると思うのです。東電の本店も情報が十分入らない、保安院にも情報が入らない。そうすると、現場から本店、保安院、官邸に来るのはものすごく時間のギャップがあるというのはすぐ分かったんです。それを補える手段としては、官邸でやるしかないだろうと。あの判断は、私は正しかったと思います。確かに、法律に十分即していない判断だし、ある種マニュアルにはない判断なのですけれども、あの判断は、私は間違っていなかったと思います。

オフサイトセンターもだめでしたね。オフサイトセンターも全く機能していなかったの
で、もうとにかく東京電力から直接取るしかなかったんです。そこで考えたのが、東京電
力の主たる人間を呼んで直接やることと、あとはもう最後の望みの綱が、吉田さんと携帯
で私も何度かやり取りしていたのですけれども、それで何とか補っていたのです。

○質問者 今の情報との関係で、官邸の5階と地下にありましたよね、対策室が。私ども
もいろいろ調査している関係で、官邸の5階と地下の情報交換と言いますか、これが上手
く作用していなかったのではないかというふうに思われるのですが、そのあたりは何かな
いですか。

○細野大臣 11日から12日にかけては、海江田大臣と私は地下にいたんですね。

○質問者 そうですか。

○細野大臣

○質問者

○細野大臣 そうですか。あそこで丸くなってみんなで打ち合わせできることになっ
ているのですが、あそこは何をやっていたかということ、地震とか津波のいろいろな情報を共有
していたんですよ。

携帯が
つながらないので、これはものすごく大きな支障で、上とも十分連絡が取れないような状
況でしたので、それで上に上がってきたんです。

今回の事故の対応で我々が苦労したのは、津波、地震に対処する災害対策本部としての
役割と、原発事故に対処する原災本部としての役割という二正面作戦を強いられたので、
そこが本当に辛いところだったんですね。

、原発の
事故というのはもうまさに本当にその場で即決の判断が求められたので、そこは5階だど
いう役割分担を12日の昼頃には、もうこれはみんなはっきり認識していたと思いますけれ
ども、そういう役割分担をしたんですよ。それで、いろいろな避難とか本当に必要なこと
に関しては、危機管理監と官房副長官（※事務局注：官房副長官補を指すものと思われる）
が上に上がってきて、官邸としての判断をしっかりとした上で、下でオペレーションをや

【取扱い厳重注意】

るということをやっていました。

○質問者 下に、例えば省庁の幹部が集まっていますよね。そういう人たちの情報を集約して、5階の方でそれを吟味するとか、そういう流れもあったんですか。

○細野大臣 その役を危機管理監と官房副長官（※事務局注：官房副長官補を指すものと思われる）、これは警察と防衛ですけれども、その2人がやっていたというふうに私は認識していました。

ただ、今から思えば、例えばヨウ素剤の問題とか、避難の、本当にどういう順番でどうなっているのかということについて5階は情報をほとんど持っていなかったんです。

○質問者 そうですね。ちょっと先に行っていますけれども、まさに最初2キロ、3キロ、10キロ、20キロと行きますよね。その情報が5階だけでほとんどやっておられて、今言われるような情報を基に、まさにマニュアル的に言うとか下から上がってきて、それをどう判断するかという話になるのですが、それをやることにはならなかったわけですね。

○細野大臣 そのこの部分の機微にやり取りをするという雰囲気では5階はなかったんですね。5階は何をやっていたかという、何とか発電所をおさめようとしていたんですよ。11日から12日にかけてもそうですし、15日まで、最後までそうでした。水素爆発をできるだけ防いで、これ以上事故がエスカレートしないようにするためにはどうするかと。

ですから、例えばどうやって水を入れるかとか、電源車をどう集めるかとか、自衛隊を出すか出さないか、そういうことをやっていて、避難のことというのは、避難をさせようと決めるわけですよね。それで、どうやって避難をさせるかというのは、まさにこれは危機管理監の世界で、それでやってくれるという、その役割分担をしていたんですよ。

私の場合は、どちらかというところから海江田大臣と一緒に炉の方の、東電とのやり取りを任されていたので、そちらだけで相当神経をすり減らしていましたから、こちらはタッチできないものというふうに自分で考えていたのですね。例えば官邸の中で、危機管理監、官房副長官だけではなくて、政務の官房長官とか副長官が果たしてどれくらいやっていたのかもちょっとよく分からないんですよ。今から思えば、もう少しそちらをしっかりとやっておいた方がよかったですらうなと。

○質問者 そうですね。まさに、福島におられて逃げろと言われた人たちは、どのくらいで帰ってこられるかどうかわからなくて、まさに着のみ着のまま逃げているんですよ。あとは、SPEEDIの問題もそうですけれども、結局方角が放射能のある方向に行ってしまったとか、そういう非常に気の毒な状態がありますよね。

○細野大臣 はい、そうです。

我々が気にしたのは、本当に水が入るか入らないかというぎりぎりの状況の中で、果たして3キロでいいのかとか、10キロでいいのかとか、病院にいる人たちは避難できるのかとか、そういうことは気にしていたんですよ。気にしていたんですけども、ではオペレーションがどうなっていて、逐一情報を受けていたかと言うと、少なくとも私のところにはその情報はなかったの、そこがもう少しきめ細かくやれなかったのかというのは思い

【取扱い嚴重注意】

ますね。

○質問者 ちょっと元に戻りますけれども、何とか原発を過酷事故にならないように一生懸命やっておられた、海水あるいは真水を入れるとか、あるいはベントを早くするかというところでいろいろやっておられたわけですね。そこは、官邸の指示と東電側の動きというのは矛盾はなかったんですか。当初は、何で早くベントしないんだ、東電はおかしいじゃないかということをおもっておられたみたいだけでも。

○細野大臣 そこは、相手が本当に何を考えているのかということが初めは疑心暗鬼で分からなかった部分もあったんですよね。例えば、1号機のベントなんかは、もう11日の夜にはやろうということになっていたわけです。もうやりますと言っていたのだけでも、いつまでたってもできなくて、それができないのか、やらないのか。ですから、12日の朝の4時とか5時頃は、何でやらないんだという話になっていたわけです。最終的には、どうもできなかったようなんですけれども、やれるみたいなことを我々は聞いていたから、なぜやれないのかということに対してのすごいフラストレーションはあったんですけれどもね。

そのフラストレーションというか、お互いに、果たして相手は何をを考えているのかが十分分からないことが、例えば海水の注入なんかにも若干影響してしまっていて、本来であれば水を入れるのは当然なのだし、真水がなくなれば海水というのはもうそれしかないわけですから、やはり初期の段階で東電は海水は嫌がってたんですよ。11日から12日の朝頃までは、まあ、それは当然です。炉を残したいと思うし、あとは、海水を入れたらその後のそれこそ処理するのが、廃炉にするのが大変になってしまいますから当然なんですけれども、そうすると、海水を入れたくないのではないかというふうに、ベントのときと同じように、ちょっと先入観があったと思います。東電は、もうベントをするしかないと思っていたし、真水がなくなったら海水しかないというふうに考えていたと思うんですけれども、本当にそう考えているのだろうか。目の前に、武黒さんと■■■■さんの2人しかいませんからね。その部分で本当にお互いに共通認識があったかという、怪しい部分がありますね。それは、12日に水素爆発があって海水が入った後あたりから、もうそんなことを言っていられなくなったので、もう12日の夜くらいからはかなり解消してきたと思いますけれどもね。

○質問者 ちょっと差し支えなければという話で、菅総理の対応でいろいろ巷間言われていますし、その関係でお聞かせいただきたいのですが、1つは、海江田経産大臣が菅総理に事態報告をして、原災法15条の緊急事態宣言をしようと言ったところ、党首会談があったので、そこで中断してしまったということがありましたよね。これは、緊急事態が先だ思うんですけれども、なぜ中断してしまったのかというあたりはどんなことだったのでしょうか。

○細野大臣 野党の党首が来て、あのときはたしか、とにかく専念してくれということをお願いに来たんですよね。中身は確認していませんけれども、恐らくそうだったと思います。

【取扱い厳重注意】

そういう話だろうというのは分かっていたんです。でも、官邸は官邸でこれはどうするかという話になっていたのも、なかなか難しい判断でしたよね。

初めは、総理がすぐに行けなかったのも、たしか岡田幹事長と興石会長が対応したはずなんです。ちょっと待ってもらったんですよ。そこですばっと緊急事態を決めてしまえばよかったのですが、やはり総理も事態を把握したいと思ったんだと思うんですよ。海江田大臣と恐らく二、三十分やり取りしていたんですかね。

○質問者 そうですね。17時42分に海江田大臣が来られて、18時12分に出られて、19時3分に緊急事態宣言をやっていますから、そのくらいの時間がありますね。

○細野大臣 そうなんですよ。

総理というのは、事態をすぐ把握したい、自分が分かった上で対応したいというのがすごくある人なので、海江田大臣におまえに任せるから、そうなんだな、では緊急事態だというタイプの人ではないんです。特に、一番初めでしたから何が起きているんだということを開きたがったわけですよ。これは、菅さんのある種の性格もあるんですよ。海江田さんも一生懸命説明をされたし、保安院の関係者も来て説明していたのですけれども、結局、私も聞いていてもちょっとどうなのかという、まだ事態が把握できないくらいの情報しかなくて、そこですばっと任せて、では緊急事態だという発令はしなかったんですよ。そうやっている間に野党が来て、多分、とにかくもう専念してくれという話だろうと分かったのも、初めは2人で対応してもらっていたんですけれども、私が頼んだんですよ。総理は今こういうことだから岡田さんと興石さんに先にお願ひしますということを行ったのですけれども、やはり行かないやならないだろうという雰囲気になったんですよ。総理も、それで行って、でもわずかでしたよ。与野党会談したのは多分15分くらいじゃないかと思うのですけれども、帰ってきてもう一回説明を聞いて、緊急事態宣言を出したんです。

ですから、その前に出すという手はあったかもしれませんが、ただ、では逆に早く出したら何か対応できたかという、それはほとんどないんですよ。ずっと連続でやっていたから。

ですから、それが、時間が例えば30分とか遅れることによって何か支障が出たとは思いませんけれども。

○質問者 もう1つは、ちょっと細かな話か、あるいはそうではないかもしれませんが、現地対策本部への権限委任の問題がありまして、御承知のように原災法20条で、その場合には現地対策本部長に委任できるというのがございますよね。これがどうもなされないまま事態が進行して、ある意味では強制権限があるような権限を委任がないままやっているわけですが、何でこんなことになったのかなと思うのですけれども、そのあたりはどんな感じですか。

○細野大臣 原災法の規定というのは、かなりそういう現地に任せるという形に確かになっていて、そのことは認識はしていました。ただ、オフサイトセンターが県庁に移ったの

【取扱い厳重注意】

は15日ですよ。15日でしたけれども、私は直接連絡はしていなかったのですけれども、見て、話を聞いていますと、保安院の担当者もあっちに行ったりこっちに行ったりして、おおよそここで判断できるような雰囲気には見ていなかったですよ。

ですから、そもそも保安院が、ERCがそういう意味で情報が取れていないということとほぼイコールで、これはオフサイトセンターもだめだとは思っていたわけです。ですから、そこはやむを得なかったと思いますけれどもね。

○質問者 逆の意味で、原災法のたてつけが、本当にこういう複合災害みたいなものが発生したときに対応できるような法律になっているのかどうなのか、そのあたりは何か感じられたことはありますか。

○細野大臣 それは、全くなっていないですよ。それはなっていないと思いますね。

ですから、オフサイトセンターの場所も大熊町にありますけれども、その後、南相馬が何かに移ることになっていきますけれども、そちらもだめでしたよね。これだけ大きな事故を想定していない。意思決定も委任をすることが前提になっていますけれども、ではそれができない場合はどうするかということについての準備もないですし、その原災法もそうですけれども、防災計画もほぼそれを写す形で詳しく書いていきますけれども、そこもそういう様々なケースを想定していないですよ。

○質問者 単純災害ですよ。

○細野大臣 そうなんです。そういう意味では、我々もそういうものがあるのは知っていたし、これはどうなっているんだと時々問い合わせたりしてその部分は見えていたのですけれども、だめだ、役に立たないと。ここは、もうこの場で決めるしかないという感じだったんですよ。

○質問者 わかりました。

次は、これもちょっとマスコミ的に、あるいは国民の関心があるところですが、総理が3月12日6時15分に班目委員長と原発に視察に行かれましたけれども、これはどういう目的で行かれたんですか。

○細野大臣 総理が現場に行くと言い出したのは、私もちょっと時間が正確ではないのですけれども、3月11日の多分夜遅くじゃないかと思うんですよ。もしかしたら日付が変わっていたかもしれません。私がまだ5階にいる頃なので、その後ベントする、しないの頃から [] 移りましたので、その前だったので11日のうちだったと思うんですよ。

なぜ行くと言い出したかという、やはり現場が分からないからです。直接聞いたわけではないのですけれども、中で総理が行きたいと言っているということをこそこそと耳打ちを受けて、ここはもう検証していただければいいと思いますので申し上げますと、私は反対だったんです。やはり指揮官が離れるということに関しては反対だったんですけれども、反対だということもそこで話し合ったときには言ったんですけれども、一方で絶対あの人は行くとは思ったんです、性格から言って。行くと決めたら行く人なんです。直接本人に行かない方がいいとは言いませんでした。もう絶対行くと思ったので。

【取扱い厳重注意】

結果としては、私は、仮にベントを遅らせることになっていなかったんだとすれば行ってよかったと思います。菅さんのその辺に対する評価は今非常に低いですけども、私は、あの人の当事者意識とか、ここを何とか乗り越えなければならないという、ちょっと非科学的に聞こえるかもしれませんが、気力とか、自分で何とかやるんだというその念の強さみたいなものは、特に3月の20日くらいまではプラスに働いたと見ているんです。

それは、やはり現地に行って現場を見て、自分の気持ちも、そこで腹を決めて、吉田さんとも話をして、それで固まったと思うんですよ。

○質問者 直接そういうお話をされましたか。帰って来られて、腹が固まったというよう

な。
○細野大臣 いや、もう見たらはっきり分かりますから。私も古い付き合いですから。古いと言っても十二、三年ですけども、見ていて、ものすごくあの人は苛烈な性格なんですよね。本当にここに決めたらみたいなどころがある人ですし、逆に関心がないことにはほとんど関心を示さないのですけれども、このことに関しては自分が何とかしなくてはならないという意識はすごく持っていましたよね。その総理のスイッチが入ったというか、それはあれだったと思います。

ただ、今から考えたらものすごく大きなリスクだったですね。万が一あそこで何らかの事故があったら、本当に本人の業務に支障を来すかもしれない、もしかしたらベントを遅らせたかもしれないというリスクがあって、私が吉田所長に一番初めに確認したかったのは、それだったんですよ。

私が初めてサイトに行ったのは、できるだけ私は行かないようにしていたので、だいぶ経ってからなんですけれども、5月の12日から18日に1泊サイトでしているんですけども、そのときに確認したかったことが幾つかあって、その1つがベントを遅らせたんじゃないかと。すごく私も止めなかったという自責の念もあったので確認したかったんですけども、彼は、少なくとも私に対しては、できなかったと言いました。私は、総理が来ようが来まいがそのときはベントはとてもしなかつたと聞いて、すごくほっとした覚えがあります。

○質問者 総理が海水を入れるのを止めるの止めないのという話が巷間出ておりますけれども、そのあたりの事実関係についてはどうなのでしょう。

○細野大臣 これはもう国会答弁のとおりです。

あれは12日の夕方ですよ。6時頃からですよ。この6時頃に海江田大臣が海水注入をしようということで入って、総理が再臨界の危険はないのかと言いだしたわけですよ。あのときは班目委員長が、可能性はゼロではないと言ったか、もしくは何でしたか。

○質問者 そういう趣旨だったですよ。

○細野大臣 そういうことをおっしゃったんですけども、可能性はゼロではないと回答があったとなっているのですけれども、私は、もうちょっと有り得るというニュアンスにとりましたね。正直驚いたんですよ。もう真水がなくなったらすぐ海水だというのは当然

【取扱い嚴重注意】

り前だと思っていたので、海江田さんが決めたらもうそれで入れるだろうと思ったわけです。ところが、総理が再臨界があるんじゃないかということを出して、そんなことがあるのかなと思って、専門家たる班目委員長が有り得るといふようなことを言ったものだから、すごく驚いたんですよ。まずいなと思ったんですよ。

それから、本当にあるのかなのかみたいな話になってしまって、このままだと延々とこの議論が続くのではないかと思ったので、私が本当にあるのかなのか検討してくれと言って、一回ブレイクしたんですよ。6時半頃やめているはずなのですけれども、それで1時間くらい議論して、それで入れるということになったんですね。

なぜ班目さんがあんなことを言ったのかというのは、ちょっとそのときは不思議だったのですけれども、後からいろいろ本人の話もちよっと聞いたり、私も当時の状況を思い起こしてこういふことではないかなと思ったのは、当時もう総理も大変なことだということで、やはり表現が相当直截になっていたんですよ。班目委員長に「再臨界は本当はないのか」と聞いたんですよ。多分、班目委員長はその気迫に押されたんですね。それで多分、ありませんとは言えなかったんです。でも、私は菅総理をずっと見ているから、菅さんというのは力が入っているときはそういう言い方をするのは当然だし、それはそのまま言い返せばいいだけで全然問題ないのですけれども、班目委員長は、菅さんのその対応に慣れていなかったもので、最高権力者にそこまで言われると、ちょっと確信がなければ、その気持ちが出た部分があったのかなというのが1つ。

もう1つは、これは私の本当に推測ですけれども、その前に水素爆発があったんですよ。水素爆発はないとはっきりと言っていたんです。水素爆発はないと言っていたのにあったので、班目委員長の中にはその辺の負い目みたいなものがあったと思うんですよ。確信を持って言うのはまずいというのがあって、それで、再臨界は有り得る、ゼロではないといふようなことを言ったのではないかというのが私の推測です。そのときに、本来は班目委員長が絶対で、我々は素人で、総理だって素人だ、こちらの言ったことが正しいということなのですけれども、関係が逆転していた可能性はあるんですよ。それでそういう表現になったのではないかと。

それで、いろいろ言われている、実は止めたんじゃないかとか、情報が官邸に入っていたのではないかということに関しては、これは断言できます。みんな海水は入っていないと思っていました。6時の時点でも。7時半の時点でも入っていないと思っていましたから。一回ブレイクして、7時半頃集まってそれで海水注入のゴーを出しているのですけれども、その時点でも入っていないと思っていましたから。私、本当に驚いたんです、5月頃吉田さんの話を聞いて。あれは、どこかが止めていたんです。要するに、吉田さんは本当に周辺だけで止めるジェスチャーをして止めていませんでしたね。東電は、止めたわけですよ。本店は止めろと言ったわけですね。止まっていなかったのだけれども、止めろと思ったわけです。

でも、止めろと言ったということは官邸には伝わっていなかったんです。東電の本店で

【取扱い厳重注意】

遮断していたか、もしくは東電の本店から来ていた武黒さん、■■■■さんが、これはやばいと、総理がここまで言っているのは、入れていたことは言わない方がいいと思ったか、どちらかですよ。

○質問者 付度しちゃったという話ですね。

今言われた、1時間のブレイクの間は、具体的には何をやっておられたんですか。海水の問題について。

○細野大臣 海水で再臨界はあるのかなのかという見解を整理していたと。

○質問者 具体的には、どういうふうに整理されたんですか。誰がどんな形で整理されたんですか。

○細野大臣 当時は、保安院と安全委員会がいましたから、一緒にやっていたか別々にやっていたかは分かりませんが、もう一つは、水素爆発というのがいま一つははっきりしていなかったの、水素爆発の経緯も検証しようという雰囲気であったんですよ。

何でそんなにのんびりしていたかという、多分お分かりにならないと思うのですが、でも、海水が入らない状況だと。準備をしていたのだけれども、水素爆発をしているんな機器が潰れてしまって入らないところから6時にスタートしているので、まず入れることができないと思っていたんですよ。

○質問者 そうなんですか。

○細野大臣 そうなんです。だから、前提としては入らない状況なのだから、しっかり検討した上でやろうと。

○質問者 入らない状況なら、入れようと思ってもどうしようもないですね。検討した上で入るようにしようという。

○細野大臣 その頃に何かテストをして入る入らないという話を東電がしているというのは漏れ聞いていたので、7時半頃に私ができるかと聞いたら入りますと言うので、じゃあ入れようというのでそれでゴーを出したんです。

○質問者 そうですか。分かりました。

それから、次に国民に対する情報提供の問題ですね。これについては、官邸としては基本的にどんなスタンスでおられたんですか。

つまり、本当に正確な情報をリアルタイムでというか、起こったときにはすぐにやるんだというのか、パニック状態を起こしてはまずいとか、そういうことを配慮しながら、やはりある程度考えつつやらなくてはいけないのか、いろいろあるうかと思うのですけれども。

○細野大臣 分かっている事実を伝えようとは思っていました。それは、終始一貫していたと思いますね。ただ、情報が官邸もすごく限られていて、どういう表現を使って言うかというのは、枝野官房長官は相当苦労したと思いますね。

○質問者 例えば、直ちには影響はないとか、あれは枝野さんの発想の言葉なんですか。

○細野大臣 枝野さんの記者会見は、私、一回も見えていないんですよ。当初のものは。

【取扱い厳重注意】

毎日、日に何回もやっていますよね。あれは、一回も見えていないのでどういう経緯で「直ちには」とか言っていたのかはちょっと分かりません。

○質問者 そういうのは官邸内で議論されたわけではないんですか。

○細野大臣 いや、かなり分散化、集まって打ち合わせをして、また分散して情報を取ってまた集まってと暫時やっていたので、ずっと一緒にいたわけではないんですよ。ですから、枝野さんの記者会見がどういう準備の下でやられていたのかは、いま一つ分かりません。ただ、ものすごくクリティカルなことは話していましたよ。

例えば、1号機が水素爆発したときに、これは記者に発表しなければいけない、でも、水素爆発が炉なのか建屋なのかと。水素爆発は分かるんだけど、爆発したのはどちらなのかという話になって、炉なら大変なことなんですよね。その場合は放射線量が周辺で当然ぐっと上がるので、どちらか分からない中で記者発表はなかなかできないですから、どちらかと。そのときは、東電も多分サイトにもかけていると思うのですが、上がっていないという話だったので、現場も大混乱でしたけれども上がっていないという話だったので、これは炉ではないと。建屋だということだけは言わないといけないというやり取りは、私なんかもしました。ただ、詳しくそれをどういうふうに表現するかとか、どういうふうに伝えるかということまでは私は打ち合わせしていないので、実際に枝野さんがその後、どういう発表をされたかを見る余裕はなかったんです。ですから、そこは見えていないです。

○質問者 国民の皆さん方が、基本的な原子力とか放射能とかそういうものに対して知識があれば、それはいろんなことをストレートに全部説明して言ってもいいと思うのですが、そうでないときにありのままを仮に説明して、理解不足のために混乱とか、そういう懸念とかいうことは考えられてはいなかったんですか。

○細野大臣 もちろん、それは頭にはありましたけれども、どちらかという、できるだけ早く伝えることと正確さをどう両立するかということに注力しておりました。

ですから、爆発がありましたということだけ伝えるのは、確かに速報性はあるのだけれども、その爆発がどういう爆発かで、どうしなければならないのか、建屋なのか炉なのかということをお伝えしないと、これはもう正確性においては初歩的なあれになるわけですよ。多分、それで30分くらい遅れているんだと思うのですが、やはりそこくらいは確認しないと報告できないだろうというやり取りはしていましたね。

なぜそこで正確性をより重視したかという、爆発しましたということだけ言うと、大変ですということで皆逃げますよね。下手すれば東京の人も逃げてしまうかもしれない。それは、考えました。

○質問者 これもちょっといろいろ議論になっている、保安院の中村審議官が3月12日に炉心溶融を起こしている、可能性があるという会見をして、その後だんだんトーンが落ちてきて、これは、官邸の方からそういう発表をするときは擦り合わせしろとかという話があったとか、なかったとかという話があるのですが、事実関係としてはどんなことがあつ

【取扱い嚴重注意】

たのでしょうか。

○細野大臣 ちょっとそこは私も分からないんですよ。中村さんとはその後またいろいろと一緒に仕事するようになったので、この人が初め記者会見していたんだというのはその頃知ったので、ですから、5月に入ってからですよ。

ただ、当時記者会見していたのは、多分東京電力と保安院と官邸だったと思うんです。文部科学省は初めしていなかったと思うんですよ。3者がそれぞれ情報共有をせずにやっていて、バラバラじゃないかみたいな問題意識は出ていたかもしれません。だから、ちゃんと正確にやろうという話は出た可能性はありますね。

ただ、私の関わりは、記者会見でどう発表するかというよりは、原発の中をどうするかということの方だったので、いま一つ分からないんですよ。

○質問者 今の、中の話で、まさにメルトダウンというか炉心が溶けているかどうかという懸念と言いますか、それはいつ頃、日々接しておられて、例えば3月11日から12日の間に、ここまでは行っているのじゃないかというのは。

○細野大臣 当時、水があと何時間入らなかつたらそれこそ圧力容器が損傷するのとか、そういうのは言っていましたね。

ただ、一方で1号機がまさに非常用復水器の水が入っているか入っていないかで混乱があったのですけれども、11日から12日にかけて。

○質問者 動いているかどうかの問題もありましたね。

○細野大臣 ええ。初めは、ベントは2号機だと言っていたんですよ。ところが突然1号機に切りかわったのは、実は非常用復水器が動いていなかったという話になって大慌てで1号機になったのですけれども、水が入っているか入っていないのかがそれぞれ分からなかったの、あと何時間やったら燃料が溶けるとか格納容器が破断するとか、確かにしたんですけれども、それがどの号機にどの時間に当てはまるのかということを整理をした情報は誰も持っていなかったと思うんですね。入っているか入っていないかがそもそも余り分からないので、正確に何時から何時までというのは把握できませんでしたから。

そういう話はしていましたよ。何時間くらい入らなければどうなるんだみたいな話はしていたのですけれども。

○質問者 例えば線量が異常に高くなっていて、それは炉心が溶けていることの一つの証左であるかもしれませんが、そんなところから、溶けているのではないとかそういうのは。

○細野大臣 燃料が溶けているだろうということは思っていましたね。ですから、溶融しているというのは認識していました。

○質問者 それは、いつ頃ですか。

○細野大臣 ですから、12日の朝、手動のベントで、東電が決死隊を作りましたよね。12日の朝方ですね。あのときにはもう放射線量が上がっていましたからね。あのときにははっきり認識していたと思います。燃料が溶け始めているということはですね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 ちよっとくどくて恐縮ですけれども、当時の補佐官はもうそういう認識を持っておられて、また中村審議官もそういう認識で多分記者会見されたと思うのですけれども、それがトーンダウンしてきているところを見ますと、どうも正確に伝えようという政府の方針がきちんと出ていないと国民は、特に後から見ると、メルトダウンを起こしてたじゃないか、やはり違っていたじゃないかという疑念をいまだに持っているわけですよね。

○細野大臣 全体として言えることなんですから、INESの評価も含めてなのですから、スタンスとして分かったことを正確に伝えようという雰囲気ではあったんですよ。逆に言うと、分かっていないことをそうかもしれないというふうには余り言わないと。ですから、本来あるべき本当の意味での正確な情報発信というのは、おおよそこういうことだろうと考えられるという全体の絵があって、ただ、不確定要因もある、と言えば一番いいのですけれども、正確な情報、分かったことを話そうということだったので、溶融はしているんだろうけれども溶融の程度は分からない、これが分かっていることなんです。

でも、その状況証拠からして、放射線量も上がっているし、水が入らなかった時間も正確には分からないけれども相当長かったということになれば、溶融の程度は相当大きいと。炉心溶融の可能性もあるけれども分からないと説明するのが多分正しいリスコミュニケーションだったんでしょうね。

○質問者 そうですよね。ですから、国民の目から見ると、小出しにされているのではないかと、正確に伝わっていないのではないかと、そういう見方になってしまうだろうと思わすけど。

○細野大臣 当時、会見のやり方ということには私は余り関与していなかったのですけれども、雰囲気としてあったのは、分かった事実をできるだけ正確に話そうということでした。そのずっと後になって、4月の後半になってから私が会見するようになったのですけれども、その頃からは少しずつ全体像が分かっていたので、私が心がけたのは、正確に分からなくてもおおよそこういうことではないかというのは、議論をしまさず全体像を話そうと。個別にはこうだと。例えば作業員の放射線量がこれくらいになっているという1人のデータが出てきて、例えば50ミリを超えた人が1人出てきたとか、実はもっと高かったとか、1人出てきたということは、1人出てきたのではなくてそういう人が何人いるだろうと。分かっているのは1人ですという発表の仕方をするようにしたんですよ。ですから、そこは、小さく見せようと言うよりは、本当に分からなかったで、分かったものを積み上げて、それを出していこうという発想に特に当初は立っていたと思いますね。

○質問者 分かりました。

あと、私からの最後の質問をさせていただくのですが、6月に海外に説明に行かれましたですね。これは、もちろん説明ですから、目的は説明が目的なのでしょうけれども、行かれたのはイギリス、アメリカ、フランスでしたでしょうか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 近隣の、例えば中国とか韓国とかは、これはどういうふうにしたのですか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 中国、韓国は、人をしばしば送ってきていたんですね。韓国は JNES に、JNES とは保安院の独法なのですけれども、そこに KINS という向こうの JNES のカウンターパートの人を送って来ていましたし、中国は、ほとんど具体的に何か情報を取りには来なかったんです。

2つ意味があって、英米仏に行ったのは、この3か国はいろんな技術協力をしてくれたので、そこに対するお礼と、あとは、これはちょっと国益上余り記録には残したくないので。

○質問者 ちょっと止めてください。

(以下、レコーダーデータ②)

○質問者 そうしましたら、また、時系列最初の方に戻りまして、3月11日のところから若干補足してお尋ねしたいと思います。

○細野大臣 お願いします。

○質問者 先ほどのお話ですと、11日の15時頃までに議員会館の方から官邸の方にお戻りになられて、お戻りになられてからまず5階の執務室の方に行かれたんですか。

○細野大臣 補佐官室というのは、官邸の中で言うと総理室があって、その反対側なんです。総理の秘書官室というのがあるんですね。そこは総理の執務室の隣なんです。そこが、補佐官の実際の寄り合い場所みたいにもなっていて、秘書官ともものすごく親しくなりますから、5人か6人いるのですけれども、そこに行っていました。

○質問者 そちらの方にしばらくの間はずっと詰められているという状況なんですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 それで、最初は、そこでどのようなことをされていたんですか。

○細野大臣 ところが、その後が本当に、海江田大臣が来てからが大変だったので、いま一つ覚えていないのですけれども、いろんな情報が錯綜していて、特に地震が来て、すごく大きな地震だということもあったのですけれども、津波が来るというので、警察なり自衛隊を出すとか出さないとか、果たしてどれくらいの規模なのかとか、自治体と連絡が取れないとか、そういう話が錯綜していたので、寺田補佐官と私とでそういう交通整理をしていたというか、情報を整理して総理に上げなければいけない。どうやって情報を整理するか、ものすごくいろんな情報が飛び交っていたので、そんなことをやっていました。ですから、その時間、1時間か2時間くらいですか。海江田大臣が来るまでに。

○質問者 海江田大臣が来られるというのは、先ほどの上申の手続で来られるということですね。それが17時42分ですね。ですから、そうすると2時間ですね。

○細野大臣 そうですね。2時間あったんですね。そこは、全体を把握することができるかできなかったかくらいのタイミングだったので。

○質問者 総理の執務室の方に、例えば総理が情報を収集するために保安院の関係者であるとかあるいは東電の関係者なんかを、その頃、つまり海江田大臣が来られるよりも前の

【取扱い厳重注意】

段階でお呼びになられたかどうかということについては、御記憶何かありますか。

○細野大臣 いや、呼んでなかったと思いますけれどもね。

○質問者 先ほどお名前が出た武黒さんとか■さんとか、その方々と最初に接触されたというのは、御記憶ではもう少し後ということですか。

○細野大臣 後ですね。海江田大臣が来られて、どういうことなのかという情報が限定されていたので、誰か呼ばなければならないという話になって、それから2人が来たんだと思います。2人プラス随行の若い方が何人来ましたけれどもね。

○質問者 最初に会われたのは、どこでお会いになられたという記憶ですか。

○細野大臣 官邸ですね。

○質問者 官邸の総理の執務室の中ということですか。

○細野大臣 総理の執務室があって、秘書官室が横にあって、その横に大部屋があるんですよ。応接の大部屋が。でも、あのときはまだ開いていなかったかな、ちょっと正確に記憶がありませんけれども、総理はすぐに聞きたがったので、東電の2人が来てすぐに一回執務室に入っていると思います。余り正確ではないかもしれませんが。

ですから、私がこの2人から話を聞いたタイミングと総理が聞いたタイミングは、ほぼイコールではないかと思えますけれども。

○質問者 そうすると、その初期の頃に保安院の寺坂院長が総理の5階の方に上がってこられたかどうかということは、御記憶ありますか。

○細野大臣 海江田大臣と一緒に寺坂さんを連れて来ていませんでしたか。誰かと一緒に来たんですね。それで、寺坂さんだったか、あとは、次長が、今現地対策本部にいる平岡さんか。初めは寺坂さんだったんでしょうね。

海江田大臣より前にですか。ちょっとそこは記憶がないですね。総理が原発は大丈夫かみたいなことをちょっと言ったかもしれませんが。

○質問者 その前の段階では、海江田大臣が来られる前の情報収集なんかをされている頃は、総理の執務室に菅総理はおられたんですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 総理の執務室と、情報が入ればそれを伝えるに行くというような感じで往復をされていたという感じなんですかね。

○細野大臣 私ですか。

○質問者 はい。

○細野大臣 総理と個人的に一番親しいのは寺田補佐官なんです。寺田補佐官が一番そういう役をやっていたんだと思います。私は、どちらかと言うと秘書官の人たちと、津波とか地震とかでどうなっているんだみたいなことでやっていたような。すみません、本当にそこは曖昧です、正直言うと。

○質問者 当初は、海江田大臣が来られる前の頃というのは、役回りとして寺田補佐官は、どういふことを担当する、細野補佐官は、どういふことを担当する、というような役割分担み

【取扱い厳重注意】

たいなものは。

○細野大臣 それはありませんでした。

○質問者 その時点ではまだなかったと。

○細野大臣 ありませんでしたね。

○質問者 先ほどの、炉のことだとか、福一のプラントの中の対処なんかについて担当すると決まったというのは、いつ頃になりますか。

○細野大臣 海江田大臣が保安院のスタッフは連れてきたんですけども、政務三役は誰もついてきていなかったの、海江田大臣は相当その時点で大変な状況だという印象があったんですね。寺田補佐官と私とで話をして、これは3つ重なっているから、津波と地震と原発と分けようという話を、どちらをするかという話になったんですよ。これは、総理から指示されたわけではなくて、我々2人で。

それで、たまたま私が割とエネルギー政策をやっていたので、寺田君が、細野さん原発をやってくださいと言ったので、私もその方がいいかなというのは直感的に海江田さんの姿を見ていて感じたので、それで私は原発、寺田君はどちらかと言うと津波という役回りにしました。11日の何時頃かは分からないですね。ベントするしないというときには、そういう役割分担をしていましたので。

○質問者 原子力緊急事態宣言の発令が19時8分ということで、その後、原災本部の会合の第1回が20分弱くらいあったようですけれども、その頃はまだ決まっていなかったのか。

○細野大臣 その頃ではないですね。その後だと思いますね。

○質問者 その後、21時23分のところに、こちらの方で作成した時系列で書いていますけれども、福島第一原発から半径3キロ圏内の避難と、あと10キロまでのこれも避難ということが決まっておるようですけれども、当然この前の段階で官邸の方で話し合いがなされていると思われるのですが、その頃はもうすみ分けというか。

○細野大臣 その前後だと思いますね。このときは、3キロと3～10キロのこの話は、保安院と安全委員会に、念のためということも含めてどれくらい危ないんだという話をかなりしていたんですよ。

○質問者 菅総理もその場に入られていたのですか。

○細野大臣 最終的に決めたときは多分入っていたと思います。これは、総理指示ですからね。やっていたのは、政務で言うと総理と枝野長官と福山副長官と海江田大臣と私。寺田補佐官も一部入っていたかもしれませんが、寺田補佐官はどちらかと言うと津波の話をしていたので、それくらいのメンバーですね。

○質問者 役人側の方は保安院で、危機管理監とかは。

○細野大臣 危機管理監は常にいました。おられたと思います。

○質問者 そのときは、話をその場で中心になってされる方というのは、政務側と役人側ではどなたとどなたということになるんですか。それとも、そういう誰かというよりも意

【取扱い厳重注意】

見のある人がどんどん言い合うというような感じになるのか。

○細野大臣 決定は、全体として言うやはり枝野長官がしていましたね。枝野長官がして、最後は総理が判断する。総理が全部、では3キロにしようなんて言えないから枝野長官が決めていました。場の司会を誰がやっていたかという、私がやっていたかもしれませんが。ある時期から、みんなそれぞれ、知りたいじゃないですか。どういうことなんだみたいな話になるのですけれども、確かに事実を把握しないと物事を決められないのですけれども、余り細部にわたって知っても判断に影響しないじゃないですか。判断に影響しない議論になってしまうことが結構あって、総理も若干そういう傾向があるし、みんなそうなるんですよね、そういうときというのは。

それで、ちょっとそういう話はやめようと。最大で何キロ危険なのかみたいな仕切り役を誰かがしなければ前に進まない雰囲気だったので、私は補佐官なのでちょっと違うのですけれども、例えば総理の言っていることを遮ったりとか、説明が長いともっと短くしてくれとか、そういうことをやっていたのは私なんです。

ですから、このときあたりから私がやっていたかもしれません。

○質問者 このときは東電の武黒さんなんか参加をされているかどうかというのは、御記憶は。

○細野大臣 この前後です。ただ、東電の人間は、この決定には携わっていないと思います。勿論、情報は提供していたかもしれないけれども、この判断は政府の判断ですから、そこに東電の人間も意見を言うとかいうことにはなっていないと思います。

○質問者 ちなみに、このような福島第一原発から半径何キロ圏内は避難であるとか、屋内退避というような話し合いになるということは、この時点で福島第一原発の方で近い将来何か危険なことが起こるかもしれないという予測が立ったからということですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 そうすると、ある程度の情報があって、その情報に基づいて将来どういったことが起こるかもしれないというような危険の予測というのは、当時どんな予測をされておられたんですか。

○細野大臣 原発のことを多少でも知っている人間だと、水が入らないというのがどれくらい危険なことかということは分かるわけですよ。それは、私ですら分かりました。総理もすごくそのことには危機感があって、大変なことになるぞというふうには思っていたんですよ。

○質問者 当時は、恐らくこの21時の頃というのは、こちらの16時36分のところで15条事象発生ということで、その後15条通報と、要するにここに書いてあるのが、1号機で言えばIC、2号機で言えばRCICについて、それが動いているか動いていないかがよく分からぬ、水位も見えないというところから、このような通報をなされたというようなことを吉田所長がおっしゃっておられるのですが、そういう状況ですと場合によってはICが動いていないかもしれない、RCICも動いていないかもしれないというような情報、その程

【取扱い厳重注意】

度の認識はあったと。

○細野大臣 そうですね。それはありましたね。ですから、動いているか動いていないか正確に分からない状況になっていて、動いていない可能性があるのではというような説明を海江田大臣もしていましたから。そういう種類ですね。海江田大臣がしていたか、寺坂さんがしていたかは分かりませんが、そういう説明は私も聞いたので。

○質問者 仮に動いていないとすれば、いつから動かなくなったのかという問題もありますけれども、例えば16時36分の段階でもう既に動いていなかったとすれば、そこからもう4時間、5時間という時間が経ったということになりますので、相当もう炉心も露出して、先ほどの溶融ではないですけれども、相当程度進行している可能性も出てくるということになると思うのですけれども、この頃なんかは、その避難の話をするときに、またそれと併せてベントのことだとか、そういう議論なんかは。

○細野大臣 この頃は、もうそろそろ出ていたと思いますね。ベントの話は11日のそんなに遅くなる前に出ていたんです。もう1つ並行してやっていたのは、電源車を集めようという話で、それは自衛隊とか米軍まで連絡したりして、ヘリで吊ってこれられないかとか、道路はどこが寸断されているかとか、全国の電源車はどこにあるのかみたいなことをやっていたんです。

ですから、深刻さは分かっていたのですけれども、とにかくこれ以上エスカレートさせないためには電気をつなぐしかないということだったので、そのことがメインだったと思いますね。

○質問者 電源車について自衛隊なりなんかに空輸というか、そういうことをお願いしようだとか、そういう手配なんかは、官邸の5階ですと、政務の方と保安院の方とか班目委員長だとか、そういう方が普段おられて、そういう防衛省との間の取り次ぎとかいうことはどうの方が。

○細野大臣 秘書官がいますから。主要なところは秘書官が各省から来ていますから、そのあたりが窓口になっていましたね。

○質問者 あとは、こういうベントの話だとかということになってくるともう武黒さんとか、そのへんも参加してと。

○細野大臣 そうです。

○質問者 そのときに初めて、先ほどのお話ではないですけれども、東電の方々と直に触れ合う機会ができて、そのときに、最初の頃、何かベントに躊躇しているのではないかというような印象というのは受けられましたか。その武黒さんのしゃべり方や振る舞いとか。

○細野大臣 いや、深刻でしたから、当時は、班目委員長もベントしかありませんと言いついていましたからね。11日の夜に。

ですから、逆にできなかったのが意外だったんですよ。ベントというのは、緊急事態としては圧力を逃がす作業としてやることになっていると聞いたので。記者会見をしたのは

【取扱い厳重注意】

ちょっとそれから経ってからだったので、いよいよやろうということになって、小森さんまで来て記者会見をやったわけですよ。当然すぐできると。これで最悪の事態は免れて、圧力も抜けるから水も入り易くなると思ったんですよ。逆に言うと、そう思っているということは、当然入れるだろうと思っていたということですから、余りそういうふうには思いませんでしたけれども。

○質問者 先ほど、東電の方というのは、当初の印象だとどうも海水を入れることについてちょっと躊躇していると言うか、そんな印象をお持ちになられたようなことをおっしゃられておりましたけれども、具体的には、どんな言い方をしているというか、どういうところからそういうふう感じられたのでしょうか。

○細野大臣 夜、ベントの記者会見をやって、これでベントができると結果を待っていたんですよ。2時から3時頃ですね。そのときは、これでベントができる、いい報告があるといいなと思って待っていたので、そのときに少し時間があつたので、今は真水がありますけれども、なくなったらどうするんですかみたいなことを言ったら、いや、真水の方がいいんですよ。勿論、炉も傷めないのだけれども、万が一、例えば廃炉にするにしても塩水だと大変なんだということ言っていたので。それは割と落ち着いた会話の中での話です。

ベントはやろうということになったのですけれども、ベントは東電が嫌がっているんじゃないかみたいな話は、その夜中あたりからちょこちょこ入って来て。

○質問者 それは、どういうところから入って来る情報なのですか。

○細野大臣 それはちょっと、正確に私のところに入って来ている情報ではないので、海江田大臣の方に入ってきていて、それで実際にベントができていなかったものだから。その頃多分、東電の中では、避難している人がいるのだからベントはいつ頃のタイミングだという議論していたんじゃないですか。そのことは、私は知らなかったんです。

○質問者 このベントについては、もう、11日の夜頃からそういう話には出ていて、実際に、確かに3時過ぎ頃に経産省の方で海江田大臣と小森さんが共同記者会見をやられておられますけれども、その前の段階で、例えば東電なんかが発表している時系列なんかによると、菅総理大臣や海江田経産大臣、それから保安院の方にベントの了解を得たというのを1時30分頃だというふうにされているようなのですけれども、実際に例えば武黒さんなんかが、実は今こういう方向で、具体的には1号機を優先にして、ただ2号機の方も安穩とできない状況なので2号機も視野に入れつつ、1号機及び2号機についてベントを実施したいというような東電側の方針なんかを、5階の応接室なんかで明示的にそういう話があったかどうかというのは。

○細野大臣 そのときに上に上がったかどうかは、ちょっと余り覚えていないのですよね。
海江田さんに、ではここから行ってきてくださいと言って送り出して、記者会見が終わって帰ってきたのを覚えているので。

【取扱い厳重注意】

1時頃にそういうやり取りをしたかどうかは、総理の決裁を仰いでいるのですけれども、みんなで上に行って決裁を得たかもしくは、ちょっといま一つ記憶は定かではありません。ただ、当時は、ベントは2号機だったんですね。

○質問者 もともとは。

○細野大臣 はい。1時台はまだ2号機だったんです。突然、記者会見の直前かなんかにRCIC、非常用復水器が動いていないと言うので1号機に切りかわったんです。それは、私すごく深刻だなんて思って、ベントをどちらにするかなんてものすごく機微に触れる話ではないですか。大事な話じゃないですか。そのことが突然2号機から1号機に変わって、1号機が実はより深刻だったなんていうことがその直前に分かっているというのは、いかに状況を把握できていないかという証拠ですから。

○質問者 15条通報で0時57分、1時ちょっと前ですけれども、格納容器の圧力が異常上昇したと。内容としては、1号機について福一の方で計測したドライウェル圧力が1号機が600を超えているということをもって、若干通報が遅れているんですけれども、0時57分に通報しているみたいなのですが、このあたりで1号機の格納容器がここまで来ているというのは、1号機の方がむしろ危ないのではないかみたいなそんな議論というのは。

○細野大臣 当時は、そんなに全部整理して情報をみんなが把握していたわけではなかったのですけれども、2号機がもう夕方くらいからちょっと危ない危ないという話だったんですね。1号機もそうだと。これはベントしなければならないというふうになったんですけれども、その1号機の確かに通報があつて、よりこれは水が入っていないということは確かに分かったんですけれども、それで、では1号機にベントを切りかえるというような議論にはならなかったんですけれどもね。

○質問者 2号機の方が1号機よりも優先するというふうな話になっていたのは、これは何が原因というか、どちらも水位がまず見えていなかったと。恐らくICが動いているということもきちんと確認は恐らくなされていなくて、現実には動いていませんから、確認をすれば動いていないことが分かるというだけなので、確認も取れていなかったはずなんですけれども、ICとRCICが動いているか動いていないかよく分かりませんと。実際のところは、水位が21時から22時の間くらいに、1号機については水位がTAFプラス450だとか500というのが判明して、22時頃に今度は2号機の方でTAFプラス3,400くらいあると。そこで、現場の方では2号機よりも1号機の方が危ないのではないかという。

○細野大臣 それは何時頃ですか。

○質問者 これが、11日の22時頃です。

○細野大臣 では、その時間に分かっていたんですね。

○質問者 吉田所長は分かっていた。

○細野大臣 官邸では分かっていたいなかった。

○質問者 そこまでは来ていなかったということですかね。

○細野大臣 来ていなかったですね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 一応、これらの情報は、15 条通報の書式で保安院の方にも送られて、それについては地下の緊参チームのところにも全部入っていることについて、私確認しているんですけど、それが上までには来ていなかったと。

○細野大臣 [REDACTED] 紙は、私も一回も見ていないんですよ。

だから、保安院の中でいろいろやり取りをされていたりはしたのかもしれないけれども、関心事はベントをするのはどの号機であるかだったので、より深刻なのはどこだという話で、2号機がベントだというので、多分午前2時頃までは海江田さんと私の認識は揃っていたと思いますけれどもね。

ところが、記者会見をする寸前になって1号機だという話になって、小森さんはそういう発表をしたんです。海江田さんもそういうことらしい、そういうことなんだということだったので、その時点までは余り正確にそういう情報を共有されていなかったと思います。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 はい。いました。[REDACTED]さんもいましたね。

○質問者 そこで控えていて、そこではどういう話を。そこでまた、いろいろと今後の予測だとかもろもろとお話をされていたということですか。

○細野大臣 していましたね。

○質問者 場所を移ったのは、これはなぜ移られたんですか。

○細野大臣 先ほどもちょっと申し上げましたけれども、まず電話が繋がらないというのはものすごく不便だったんですね。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 はい、そうです。一切電話が繋がらないんです。5階と調整するときは一々伝令を走らせる。[REDACTED]

[REDACTED] 行き来をしなければならぬという状況だったんです。私が上に行ったときもありましたけれども、秘書官に走らせたりしていたので。

[REDACTED]

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 地下にいました。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 [REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

【取扱い厳重注意】

■
ところが行ってみると、電話はつながらないし情報もほとんどない。東電からの情報が唯一の情報みたいな感じでしたから、それで、上に上がったんですよ。

○質問者 同行されている方も含めて恐らく4名くらい来られていたと思うのですけれども、その頃、東電の武黒さん以下の方々は、東電から直接携帯電話か何かで、上かどこかつながるところに行って連絡を取られておられたんですか。

○細野大臣 もうしょっちゅう取っていました。終始やっていましたね。現場とも連絡を取っていたんじゃないですか。

○質問者 1Fの方と。

○細野大臣 はい。

○質問者 それで、順番に行きますと、3時頃に共同記者会見をやって、実際は武黒さんもそんなにベントを嫌がっているような状況ではないので、すぐにできるだろうというふうに思われていたところが、なかなかベントをやったという報告は来ないというところで、またどうなっているのかというときに、現場やあるいは東電の方に、例えば武黒さんに電話をしてもらって、そこから情報収集を図るというようなことはされていたんですか。

○細野大臣 やっていました。何で入らないんだという話になって。

記者会見が3時頃ですよ。それで、これでベントができるようになってちょっとよかったという雰囲気だったところが、いつまで経っても報告がないので、多分1時間くらいそういう話が来なくて、何でできないんだという話になってきたんですよ。かなり緊迫してきたわけですよ。圧力が上がっているという話だったし。そうしたら、多分4時半とか5時頃だと思うのですけれども、私がちょっと気になり出したのは、総理が現地に行くこと。

○質問者 その話はいつ頃から。

○細野大臣 前の日の夜ですね。11時とかだったと思いますけれども、それが頭にあったので。総理が行ったのが6時ですよ。

だから休んでもらってたんですよ。総理には。寝ていたかどうかは分かりませんよ。総理には休んでもらった方がいいという意識だったので、とにかく我々は総理のところへ飛び込まないようにしていたんです。その間は。

○質問者 執務室の方でお休みなられていたと。

○細野大臣 執務室の奥で休んでいたんだと思いますけれども、正確にはちょっと分かりません。

それもすごく気になっていたし、そもそも1時間以上ベントができないというのも、これまでの説明ではあり得ないことだったので、何でやれないんだという話になったら、何度か電話をしたりして、何で分からないみたいな話から、線量が上がったので手動のベントができなくなったと言うので、本当に危ないと思ったんですけれどもね。

○質問者 それは、武黒さんたちの東電情報としてそういう情報を把握されたということ

【取扱い厳重注意】

ですね。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 それで本当に危ないとなって、その危なさが解消されることが確認できないところで、総理ももう行くということで行かれるということになるわけですね。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 その前の段階のところ、また避難の話なのですけども、先ほどの3から10キロ圏内が屋内退避であったものが、5時44分のところで、10キロまでが避難をする、場所的にも移動するというようなことで指示が出ているみたいなのですけども、これについて別途5階の方にみんなが集まって、また同様の菅総理以下の官邸の政務の方々と役人の方で話をされるというようなことはあったのですか。

○細野大臣 あのと時10キロに拡大していますよね。これは5時44分ですね。これですよ。このときかなり緊迫してきていて、圧力は高まっているし3キロでは収まらないかもしれないみたいな話を地下で、そのとき[]に班目さんもいたんです、していたんですよね。それで、当然最後の判断は総理の決裁も仰いでいますけれども、その前に官房長官の決裁も仰いで、総理もあのと時地下に来たのかもしれないですね。地下に一回来たのか、行く前に。

○質問者 []

○細野大臣 []

○質問者 それで、それから30分くらいで出発されるということになるんですよ。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 いずれにしても、[]

[] 1号機の状態が非常にまずいというような話なんかがかきかけで、ちょっと広げるという話になったんですか。

○細野大臣 そうですね。3キロでは収まらないかもしれないという話になったので、それで10キロにしたんですよ。

○質問者 このとき政務の方でおられた方というのは、この意思決定のところに関わられた方というのは、総理と官房長官はそうなのでしょうけれども、ほかには、細野大臣以外はどのような方が。

○細野大臣 海江田大臣は関わっていると思います。海江田さんと私は必ずセットで動いていましたから、当時は。福山副長官も関わっていると思います。大体もうそのセットだったんですよ。最終判断は総理、実務的な判断は、枝野官房長官、福山副長官、海江田大臣、私が入って、寺田君が総理との関係でいろいろ出入りをするという感じでした。

○質問者 それから総理が行かれて、恐らく総理が福島の方に行かれている間に今度は福島第二原発が緊急事態宣言を発令するとともに、またちょっと1号機の後追いのような形で3キロから10キロ圏内が屋内退避というような形で避難区域の設定なんかをされているようなのですけれども、この議論なんかは、もともとこの話が出始めたのは菅総理が行か

【取扱い厳重注意】

れた後の話ですか。

○細野大臣 そうなんです。これはですね、決定自体は第一原発でやっているのと同じことだったので、第二もそういうことになった、まずは3キロだというのは、パパパッと情報を共有して議論もせずに決めたのは決めたんですよね。この決定は、総理のヘリに電話をしているんじゃないかな。一回ヘリに電話したんですよね。ヘリの中に緊急電話みたいなものがあるんですよ。自衛隊のヘリに。

○質問者 それで連絡は取れて。

○細野大臣 いや、これはちょっと不確かですね。ちょっと定かではありません。ただ、この第二の決定は、もう第一がもっとシビアだったから、そうなのか、ではそちらもということで、しかも3キロという範囲だったので、1号機の10キロという方がはるかに深刻だったので、さっと決まったのだけはよく覚えています。

○質問者 それで、現地にいる総理にいずれかの手段で連絡を取って、最終的な決裁をいただくというような形になるわけですね。

○細野大臣 はい。そうですね。ごめんなさい、電話は定かではありません。

そうか、このときはもう着いているんですよね。ヘリにいるときに電話しようと思ったけれどもつながらなかったか何かで、現地に着いたらすぐに判断をしてもらおう、そういうオペレーションをしたのかもしれない。ちょっとそれは、直接私はやっていないので。

○質問者 それで、総理が官邸の方にお戻りになられたのは、いつ頃だったという記憶ですか。福島第一原発自体は8時過ぎに。

○細野大臣 確か、一回空中で被災地の津波のところを見て回っているんですよね。

水素爆発よりは前ですよ。

○質問者 水素爆発ですと、もう15時36分ですよ。

○細野大臣 それよりは前ですね。原災本部をやっていますね。この原災本部は総理がいるときやるかやらないかで議論して、帰ってきてからやったんですよね。3回目の原災本部をやっていますから。このときは総理は帰ってきているはずですね。

○質問者 総理がおられない間というのは、どういうことをされていたんですか。

○細野大臣 いや、これはもうベントですよ。1号機のベント。決死隊を作れと。それは、東電としては社員を守りたいし危険なところには行かせられないみたいな話があったのですけれども、ベントができなかったら大変だというのは共通認識だったので、決死隊を作ってもやってくれと。今そこに人はそれしかいないので、具体的に班分けして、アラームを付けて行っているはずで、たしか。1班から行って、1班は上手くいった。2班はちょっと回して、3班は空振ったとか、途中で帰ってきたとか、そういうのをたしかやっていますか。

○質問者 はい。9時以降ですね。

○細野大臣 はい。